

「生ける神の子キリスト」－マタイによる福音書講解説教 71－

詩篇 第51章 16節～19節  
マタイによる福音書 第16章 1節～20節

説教 岡村 恒 牧師

「あなたこそ、生ける神の子キリストです」。(16節)この告白が、今朝も世界中で響いています。私たちの教会の信仰の言葉は、この一言に凝縮されています。この驚くべき言葉は、私たちの想像をはるかに越えた力を持つ言葉です。

さてこの日、しるしを求める人々に向かって、主イエスが口になさったのは旧約聖書の預言者ヨナの名前でした。どうしても神の心を理解することができず、神に逆らい、自分の思いや判断を神に認めさせようとした頑固な人物ヨナが、神の徹底した愛と憐れみに触れる物語です。

私たちのために十字架にお架かり下さり、三日目に復活して私たちの救いを実現して下さいました主イエス・キリスト。このお方を神のひとり子、救い主として信じて、神の愛と憐れみの中で生きるかどうか、ただその一点に私たちの救いがかかっています。

主イエスは続けて、「パン種」の話をされました。「パン種」は、ほんの少量でも、パン生地全体に浸透して膨らませます。パン全体が、その影響から無関係でいられるような部分はどこにもありません。この世の権力、お金、宗教的な言葉やしきたり、そういったもろもろの価値が、私たちの中に浸透して、味をつけ、膨らませていきます。宗教的なパン種というのは、敬虔な姿をとりつくりながら、自分中心に、神が自分の主だということを認めることができない考え方のことです。このパン種は、私たちの信仰と生活全体に影響を及ぼし、主イエスがいったいどなたなのかという一点を見えなくしてしまうのです。

主イエスはペリポ・カイザリヤ地方で、弟子たちにお尋ねになりました。「人々は人の子をだれと言っているか」(13節)。私たちは普通、教会の礼拝や、どこか神聖な特別な場所で信仰の告白がなされるものだと思います。しかし、私たちの信仰の中身が問われ、試されるのは、いつでも旅の途中、異教の地です。肝心な事は、日常の生活の中で、問われるのです。

弟子たちは答えます。「ある人々はバプテスマのヨハネだと言っています。しかし、ほかの人たちは、エリヤだと言い、また、エレミヤあるいは預言者のひとりだ、と言っている者もあります」(14節)。

主イエスとは、いったい何者なのでしょう。この問いは、今も変わらず世界中で問われている問いです。そしてこの問いは、いつでも、礼拝の中でよりもむしろ、私たちの日常生活のただ中で問われます。主イエスは、私たちの歩みを止めて問われるのです。「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。私たちにとって、この問いはいつでも決定的な問いなのです。

主イエスは、旅の途中で、つまり、私たちが今歩んでいる信仰の旅、地上の旅、帰るべき故郷をめざすこの旅の途中で、私たちの口から、私たちの言葉で、この問いへの答えを聞きたいとお求めになられます。

ペテロは答えて言いました。「あなたこそ、生ける神の子キリストです」。(16節)ペテロが何か特別に立派な正解を手にしていて訳ではありません。主ご自身がお尋ねになって、この答えを引き出して下さったのです。まず、主イエスが、弟子たちの告白を聞きたいとお求めになりました。主イエスの熱い思いに導かれて、ペテロの口から、そして私たちの口から信仰の言葉が響きだしていくのです。

この主イエスについての告白、本当の言葉を語ることは、人間の力によるものではありません。「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない」(コリント人への第一の手紙 12章3節)と聖書が語る通りです。キリスト者は誰もが聖霊の宮です。聖霊を注がれて、主イエス・キリストを信じる信仰が与えられ、告白が導き出されます。その信仰者を岩として教会が建てられていくのです。天国のカギを持つ者として、隣り人の救いのために用いられていくのです。宗教改革において確認されたことも同じでした。

一人一人の信仰者が、「イエスはキリストである」という告白を口にして、神の国の力を行使していく者として用いられていきます。信仰の戦いのまっただ中で、聖霊は私たちの口に信仰の告白を入れて下さいます。主イエス・キリストについての本当の言葉、信仰の告白を、私たちは口にして生きるのです。終わりの日に備え、今この瞬間も私たちのために取りなしておられる主イエスに支えられて、私たちはこの告白を口にして歩いていくのです。

(記 岡村 恒)